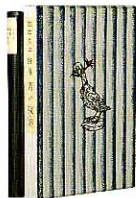


詩歌

ふくしまの

8 青い夜道

田中冬二
詩 昭和四年（一九二九）



いっばいの星だ
くらしい夜みちは
星雲の中へでもはひりさうだ
とほい村は
青いあられ酒を あびてゐる

少年がひとりぼつちでたどる夜道、風呂敷包みに背負った柱時計がねむたげに、寂しくリフレインする。「ぼむ ぼむ ぼうむ ぼむ……」。昭和期の代表的な抒情詩人田中冬二の処女詩集では、田園の風光をラムネのピンを透かして見るような淡い幻想として捕らえ、清爽の香りを放つ。

10 北窓

山本友一
短歌 昭和一六年（一九四一）

湯にくだるながき廊下になびき寄り日のくるま
で穂萱の光（岩代高湯）



著者は、昭和六年に旧満州に渡り満鉄に勤め、鉄道建設に従事した。終戦後の混乱のなか九死に一生を得て帰国、この間、『国民文学』同人として作歌し、これは第一歌集。以後十数冊の歌集を出版した。初版は昭和一六年であるが、昭和五一年に再版された。

兵ならぬ身のくやしきは胸さわき押ししづめつつ
爆撃されぬ

辛うじて吾はなぐさむ背後より陥れたることかつ
て無し

北窓の光にひろげ日毎しらぶかかると面も軍の機
密か



田中冬二（たなか・ふゆじ）
明治二七・一〇・一
三、昭和五五・四・
九、福島市生、幼く
して県外に転居した
が、昭和一九年八月
に安田銀行郡山支店
長となり二年六月
まで在勤、福島県内
の詩人たちと詩心の交流を深め大きな影響
を与えた。詩集「晩春の日に」で高村光太
郎賞受賞、福島県文学賞の審査員も務めた。

山本友一（やまもと・ともいち）
明治四三・三・七、福島市生、歌誌「地
中海」を創刊、昭和四九年から七年間、宮
中歌会始の選者をつとめた。「布衣」『日
の充実』等。